

# 張保阜の赤山法華院と円仁の赤山禪院

金 炳坤

## はじめに

日本初の大師号を贈られるなど、日本仏教の基盤を固めた学僧として評価されている慈覚大師円仁は、入唐求法中に張保阜が創建した赤山法華院に逗留することになる。ここで彼は赤山の神に対して、自身を守って求法の立志を遂げさせてくれるようにと祈願し、もしこのような所願が成就すれば、帰国後、このことを称えるための禪院を建立するという誓願を立てることになる。さらに、ここで新羅僧聖琳より五台山の話聞き、このことがきっかけとなり、唐での本格的な求法活動を開始するようになる。その後も円仁は、多くの在唐新羅人に惜しまぬ支援と献身的な庇護を受け、張保阜が構築した東アジアの海上ネットワークを利用して、九年六か月に及ぶ求法の修行を無事に終え、帰国することになる。

日本天台宗の要請により、韓国の莞島郡によって、比叡山延暦寺に建てられた清海鎮大使張保阜碑（2002年1月13日除幕法要）は、このような張保阜と円仁の関係が再び注目されるきっかけとなったが、いまだにその地位を確立していないのが現状である。

宗勢の確立のために多忙であった円仁は、在世中に赤山法華院での誓願（840年）を成し遂げないまま、遺誡においてこのことを託すことになる。円仁の遺志を継いだ弟子たちによって888年に建立された赤山禪院は、このような淵源を有しているが、あいにく現在の赤山禪院では、これに関連するいかなる史跡も残っていない。比叡山延暦寺のなかでは、848年に円仁が創建した横川中堂の正面に位置する、後人たちの手によって建てられた赤山明神社（現在の赤山宮）が唯一この史実を伝えるのみである。

## 1 清海鎮大使張保阜と慈覚大師円仁

（社）張保阜記念事業会、莞島郡（韓国全羅南道）が主催し、木浦大島嶼文化研究院、張保阜海洋経営史研究会が主管する「2015年張保阜国際学術会議：東アジア法華寺（院）のネットワークと張保阜」の主催側から、筆者に与えられた論題は「日本天台宗遺跡の観光資源化の現状」である。

かみ砕いて言えば、「日本の天台宗における「清海鎮大使張保阜」関連の文化遺産の調査ならびにその観光事業化に向けた現状報告」ということになろうか。

この難題を抱えて、比叡山延暦寺を目指したのは、2015年8月18日のことである。なぜなら、そこには、慈覚大師御生誕千二百年を記念して、延暦寺側の要請により、2001年12月に莞島郡によって建立された「清海鎮大使張保阜碑」があるからである。

この記念碑の背面には、韓国語で、清海鎮大使張保臯 (?-841) と慈覚大師円仁 (794-864) の関係が刻されており、記念碑の手前左側に建っている小さい石碑 (【図12】参照) には、その日本語バージョン (背面は英語) が刻まれている。以下はその全文である。

張保臯 (弓福, 弓巴, 寶高) は、新羅の人で九世紀前半に新羅、日本、唐三國の海運秩序を治め、東南アジアをはじめとしてアラビア、ペルシアと活潑な海上交通を広げた海上王である。新羅西南海の莞島で生まれ、崇高な意志をいだき唐にわたり、三十歳にして武寧軍軍中小將に昇進する。彼は生來の勇猛さと海のごとき度量の持ち主であった。東アジアの海上で横行した人身賣買に義憤慷慨し、興徳王三年 (828) 歸國、莞島に清海鎮を設置し、海賊を掃蕩し安全で平和な航路を開いた。日本天台宗第三世座主慈覚大師円仁は、九世紀中葉九年半に及ぶ入唐求法の際、張大使の援助のもと大使建立の赤山法華院に留錫して、その因縁により五臺山や長安の地に巡禮を果たすことができた。

大師の日記「入唐求法巡禮行記」のなかで、張大使に對する欽仰の情を次のごとく誌している。

生年未祇 奉久承高風 伏増欽仰仲春己暄 伏惟大使尊體 動止萬福 卽此圓仁遙蒙仁德无任勤  
圓仁爲果舊情 淹滯唐境 微身多幸留遊大使本願之地 感慶之外 難以喻言 圓仁辭鄉之時 伏蒙  
筑前大守寄書一封 轉獻大使 忽遇船沈淺海 漂失資物 所付書札隨波沈落 悵悵之情 無日不積  
伏冀莫賜怪責 祇奉未期 但増馳結之情 謹封狀起居 不宣謹狀

開成五 (840) 年二月十七日 日本國 求法僧 傳燈法師位 圓仁 狀上

清海鎮大使 麾下 謹空<sup>(1)</sup>

後學の者は、大師の求法體驗談を通じて九世紀の新羅・日本・唐の文化交流の實相を伺い得る。二人の築きあげた深い友情が、今後の韓日兩國の人人に周知され、兩國の友好に寄與することを望みつつ、大師棲身の地、比叡山にこの碑を建てて。

設立 2001年12月 大韓民國 莞島郡 (清海鎮)

文中には、世界三大旅行記の一つに数えられる、慈覚大師円仁の『入唐求法巡禮行記』 (以下、『行記』) のなかにしたためられた、円仁が張保臯に宛てた手紙が引用されており、その内容から我々は、円仁の張保臯に對する尊崇の念を存分に知ることができる<sup>(2)</sup>。

## 1. 1 円仁と赤山法華院

さて、二度の失敗の末、三度目にしてやっと唐の地に足を踏み入れた (上陸: 838年7月2日) 円仁であるが、請益僧 (短期留学僧) という身分が邪魔をして、無念にも、念願であった天台山行きが許されずに、開元寺で足止め (838年8月24日から839年2月18日まで) をされる

など、苦境に立たされてしまうことになる。

そのような境遇にあった円仁に対して、救いの手を差し伸べてくれたのは、ほかでもない、多くの在唐新羅人であった。志半ばで頓挫しそうになった円仁は、異国の地での生きる術を身につけ、唐での地位を確立していた多くの在唐新羅人に、留住のための様々なノウハウを伝授され、ついに国禁を犯し、不法滞在の意志を固め、唐での留住を決意する（839年3月5日）に至った。

察するに、このような円仁の選択には、おそらく、危機迫っていた当時の日本天台宗の状況を打破すべく、彼に託されていた以下のような事柄が、その背景にあったからであろうと思われる。

すなわち、一つ目は、日本天台宗の特質を顕示すべく、最澄（767-822）によって打ち出された「円密一致」という教理に対して、正当天台宗たる中国天台宗側からの見解を求め、その根拠を得ようとせんがための目的。二つ目は、空海（774-835）の真言宗の台頭により、失ってしまった日本天台宗の密教学に対する権威を取り戻し、真言宗に対抗すべく、密教学に関する資料を収集せんがための目的。この二つの目的を完遂することこそ、日本の天台宗側が円仁に対して課した使命であり、これを成就することこそ、彼の入唐の目的であったに違いない。

ともあれ、その後も紆余曲折あって、円仁の受難は尽きないが、839年6月8日ようやく赤山法華院に登ることとなり、しばらくの間、ここにその身を寄せることになる。

円仁は『行記』のなかに、この赤山法華院について、下記のように記している。

其の赤山は純ら是れ巖石高く秀でたる処、即ち文登県清寧郷赤山村なり。山裏に寺有り。赤山法花院と名づく。本と張宝高初めて建つる所なり。張<sup>(3)</sup>の庄田有り。以て粥飯に充つ。其の庄田は一年に五百石の米を得。冬夏に講説す。冬は『法花経』を講じ、夏は八巻の『金光明経』を講ず。長年之れを講ぜり<sup>(4)</sup>。

我々はこの記事を通して、この寺が張保臯によって創建され、冬の間、そこで『法華経』が講じられていたことを、初めて知ることとなる。実際に円仁は、839年11月16日から840年1月15日までに赤山法華院で行われた「法華会」に参列している。

『行記』における上記の記録は、張保臯と赤山法華院の関係を歴史の表舞台に初めて知らしめたという点で、さらに『行記』における赤山法華院関連の記述は、九世紀当時の在唐新羅人の仏教に対する、あるいは法華信仰に対する様子を伝えたという点で、この『行記』及びこれを録した円仁の功績は、高く評価されなければならない。

とりわけ、円仁という人物に対する評価についても、海東（韓国）の「法華一代史」を考える上で、『行記』という新たな資料を提示したという側面より、再考されるべき余地があろう

と思われる。

円仁はこの赤山法華院で、一大転換のきっかけをつかむことになる。それは、新羅僧聖琳より、天台の修行法（法華三昧）が行われている五台山のことを聞いた（839年7月23日）ことに起因するものであって、これにより円仁は、五台山巡礼という新たな希望を見出し、840年2月19日に赤山法華院を後にし、五台山に向かうことになる。

その後も円仁は、唐の時事に長けていた多くの在唐新羅人の手厚い庇護を受け、また、東アジアの海上ネットワークを構築していた張保臯船団からの支援のもと、五台山と、長安での求法を終え、それから五年余りを経て、再び赤山法華院に戻ってくる（845年9月）ことになる。

しかし、ある日の夢にも出てきた（840年10月17日）赤山法華院は、その間に起こった「会昌の廃仏」に遭い、見るも無残に破壊し尽され、もはや人の泊まるようなところではなくなっていた様子であった。

かくして、所期の目的を達成した円仁は、新羅人金珍らの船に乗って847年9月2日に赤山浦を発ち、新羅の南海の島々を通り抜け、18日に鴻臚館（福岡県福岡市中央区）の前に到っている。九年六か月に及ぶ円仁の入唐求法の旅は、こうやって終りを告げるのである。

しかしながら、日本側の円仁関連の研究のなかに、以上のような意義において、ここ赤山法華院がクローズアップされることは、あまりにも少ない。というのも、円仁が日本の仏教界に残した数々の足跡に比べれば、取るに足らぬことと考えられたからかも知れない。

## 1. 2 円仁と赤山禪院

円仁が赤山法華院を去る二日前（840年2月17日）に、崔暈に託して張保臯に宛てた手紙の内容からも分かるように、円仁は入唐の前にすでに張保臯の名声を聞いており、彼のことを知っていたことは疑う余地がない。

ただし、残された資料による限りでは、841年11月に死する（『続日本後紀』、『三国史記』は846年）張保臯本人と、円仁が相見えたという史実は見当たらない。

『慈覚大師伝<sup>(5)</sup>』（通行本）によれば、円仁は、840年の春、海の諸尊と、赤山の神とに、必ずや冥助を施し、「本願」を遂げさせてくれるようにと祈願している。その上、もしも自分が無事に本国に帰ることができれば、禪院を建立し、法門を弘伝するはもちろん、赤山の神の資益に当たると誓っている。そして、赤山では、盛んに禅法が伝わるために、このような誓願を立てたと言っている。

このことこそが「赤山禪院」建立の最たる所以になるわけである。しかしながら、『行記』には、このことについては、何も語られていない。

この誓願を發した地は、おそらくは「赤山法華院」とみて差し支えなかりょう。しかし、その対象たるや、あくまでも「赤山の神」であって、この「禪院」が、張保臯の影響による、ある

いは、張保阜を称えるがために、というニュアンスや認識のもとに建立されたものではないことは、はっきりしておかなければならない。

参考までに、武覚超博士の『比叡山諸堂史の研究』では、赤山禪院について以下のように記している。

京都西坂本（京都市左京区修学院）には西谷所属の赤山禪院がある。当禪院は、慈覚大師入唐求法の折、山東半島にある赤山法華院の赤山明神を日本へ勧請したもので、円仁の遺言により、諸弟子が大納言南淵年名の旧山莊をその地に選び、仁和四年（八八八）に創建したと伝えている（『慈覚大師伝』『山門堂社由緒記』）<sup>(6)</sup>。

円仁は、入唐求法の目的を果たすことができたのは赤山の神の加護によるものとして、「赤山明神」のために禪院を造るべきことを遺言、のち弟子たちによって赤山禪院が京都西坂本に創建された。円仁以後、赤山明神は日吉山王と並んで天台宗の守護神として篤い尊崇を受けることになるのである<sup>(7)</sup>。

そして、『慈覚大師伝<sup>(8)</sup>』（通行本）に記される遺言においても「又た、赤山の神の為に、禪院を造らんと、是れ求法の事をして、障礙有ること無からしめんとせんが為めの願なり」と示されているように、赤山禪院は、実際に張保阜とは、直接的な関連性を有するところではなく、「赤山の神」を祀るために建立されたものであること、これに異論を挟む余地はない。

### 1. 3 法華寺(院)のネットワークの復元と活用

847年9月19日に帰国した円仁は、その後の生涯を、最澄以来の「鎮護国家」と「福利群生」という理念のもと、本願であった日本天台宗の教線拡大のために捧げることになる。それゆえに、在世中は、ある意味付随とも言える赤山法華院での誓願、すなわち、禪院の建立という誓願を叶えることができずに、彼の意志を継いだ弟子（安然か、841-915頃）・檀越らの力によって、円仁の遷化より24年の歳月を経て、888年に建立されることになる。

【表1】法華寺(院)のネットワークの復元と活用

中国	韓国	日本
赤山法華院	莞島法華寺址	赤山禪院
	濟州島法華寺址	

さて、「2015年張保阜国際学術会議」の主たる目的は、張保阜によって創建されしところの

中国山東省の赤山法華院と、これに准ずるような性格を持つものと考えられる、韓国の莞島（清海鎮）ならびに濟州島の法華寺址、それに、現在、赤山明神が祀られる日本の赤山禪院をも入れて、東アジア三国の「法華寺(院)のネットワークの復元と活用」というテーマでの議論であって、なかでも筆者に求められているところは、日本の赤山禪院について論じていることである。

だが、前述したように、この赤山禪院は、全くその淵源を異にするものである。また、その性格においても、中国の赤山法華院は、在唐新羅人がその中心をなす、彼らにとっての信仰の拠り所としての役割はもちろん、商業・貿易・官公など、様々な職種の人々が集う、多様な機能を兼ね備えた社会的なコミュニティとしての性格を有している。これに対して、赤山禪院は、韓国の莞島や濟州島の法華寺址のように、張保臯とその関連勢力の影響下に置かれるといった性格を持つものではなく、もっぱら、赤山の神を奉安するために建立された神社としての性格を有するものであるために、両者と同じ土壌で同等に扱おうとするこの筋書き自体について、筆者は疑問を呈さずにはいられないわけである。

従って、上記の四箇所中、中国と韓国の三箇寺はともかくとして、日本の赤山禪院は、赤山というつながりはあるにせよ、そもそも禪院という名称からしても、法華寺(院)の一角を担うようなものではないために、これを別個として考えるのが妥当であると言わざるを得ない。

「法華寺(院)のネットワーク」という観点から、両者（赤山法華院と赤山禪院）を論ずることは到底できないが、「張保臯と円仁」の関係より、両者を関連付けるならば、以下のような視点からのアプローチ、すなわち、張保臯と在唐新羅人に対する恩徳を物語の中心として展開させることによって、その糸口を見つけることはできると考える。

張保臯が建てた赤山法華院での出来事が、円仁にとってのターニングポイントになっていることは紛れもない事実である。そこで円仁は、所願満足して無事帰国できれば、求法成就と海難守護の恩徳に報いるとして、日本で赤山の神を祀るべく、禪院を建てると、唐での最初の誓願を立てている。

赤山法華院を離れてから、入唐の本願が実を結ぶまでも、大陸に進出していた多くの新羅人に会い、物心両面にわたる支援を受けたこともさることながら、帰国にあたっての便宜を回ってくれたのも、とりもなおさず張保臯によって築き上げられた東アジアの海上ネットワークに携わる人々であった。こうした多くの新羅人に被った恩徳は、一考に値することのように思われる。

帰国後の円仁は、入唐求法の成果を披露しつつ、日本天台宗の宗勢を勢い付けることに専念し、やがて為政者までも味方に付けるなど、日本での天台宗の地立を万全なるものにするのである。しかし、そのために、晩年になるまで、禪院の建立という宿願を果たせずにいた。

円仁は最期の誓願として、遺言のなかで、禪院の建立を望むほどであったから、禪院の建立

が円仁にとっての心残りであったことは、想像するに難くない。

こうした張保阜をはじめ、在唐期間中に会った多くの新羅人に対する様々な思いが、晩年の円仁を動かし、そうした温情に対する謝意を込めての遺言であったとするならば、こういう円仁の心情をくむことによって、間接的ではあるが、その関連性を指摘することができるのではなかろうか。しかしながらこうした記録があるわけではなく、以上は筆者の苦心に依る想像に過ぎない。

## 2 比叡山における円仁ゆかりの史跡

前章において明らかにしたように、赤山禪院は、赤山法華院と同様の性格を有するところではない。従って、法華寺(院)という観点より、両者を論ずることはできない。

しかしながら、入唐中の円仁が、張保阜をはじめ、多くの在唐新羅人に支えられていたという事実には変わりがなく、それがために、帰国後の円仁が、入唐中の成果に基づいて、日本の仏教に独自性を持たせ、日本仏教という新たなページを開いていく、その間接的な縁になっていたことまでは否定できない。

ゆえに筆者は、この間接的な縁を軸として、与えられた「日本の天台宗における「清海鎮大使張保阜」関連の文化遺産の調査ならびにその観光事業化に向けた現状報告」という課題を遂行していくために、帰国後の円仁の比叡山における活動を中心に、これを論じていくことにしたい。

【表2】円仁関連略年表<sup>(9)</sup>

西暦	事蹟
785	最澄、7月中旬初めて比叡山に登り草庵を結ぶ。
788	最澄、近江国(滋賀県)比叡山に一乗止観院(のちの延暦寺)を創建する。
794	円仁、下野国都賀郡に生まれる。
806	1月26日、天台宗に年分度者二名(止観業・遮那業)が許可される(天台宗の公認)。
808	円仁、広智に従い比叡山に登り、最澄の弟子となる(一説810年)。
813	12月、円仁、官試に及第し、天台宗止観業の年分度者となる。
818	最澄、六所宝塔・九院・十六院・結界地など比叡山の堂塔伽藍構想(東塔・西塔)を発表する。
822	6月4日、最澄死去する。
823	嵯峨天皇より延暦寺の寺額を賜り、比叡山寺を延暦寺に改称する。 円仁、最澄の本願により籠山を始める(828年、請われて籠山を中止する)。
829	横川首楞嚴院を建てる(一説831年)。
833	病気になり横川の草庵に籠り、如法經書写を行う(一説829年、一説831年)。
835	遣唐請益僧の勅許が下る。

838	6月13日、大宰府を出発し、唐へ向かう。7月2日、揚州海陵県白潮鎮桑田郷東梁富豊村に上陸する。
839	6月8日、登州に着き、文登県清寧郷赤山村の赤山法華院に入る。
840	2月19日、赤山法華院を出て、登州府に向かう。この間、赤山神に求法の本願を遂げられるように祈願し、帰国後に禪院を建立することを誓う。
841	11月、張保臯亡くなる（『続日本後紀』）。
845	8月24日、赤山に到着する。会昌の廃仏により赤山法華院も破壊されたことを知る。
847	9月2日、日本に向けて出船。9月19日、帰国。九州大宰府鴻臚館に入る。12月14日、『入唐求法巡礼行記』終わる。
848	13年ぶりに比叡山へ帰山。9月、 <b>横川中堂</b> （根本観音堂）を創建して聖観音と毘沙門天を安置する（のちに <b>赤山社</b> が建てられる）。
850	12月14日、天台宗年次度者の遮那業を大日業・金剛頂業・蘇悉地業に分け、止観業と合わせて四名に増やすことが許可される。
851	8月、東塔に <b>常行堂</b> を創建（一説848年）し、五会念仏を始修する。
854	4月3日、天台座主に補任される。
856	7月16日、中国五台山竹林寺風の <b>浄土院</b> 廟供を始修する（一説858年）。
861	10月、清和天皇の勅願により <b>文殊楼院</b> （一行三昧院）を創建する。
862	9月、文徳天皇の御願により <b>法華総持院</b> （建造は、853年から10か年を要して862年に完成）を創建する。
864	1月13日、諸弟子をあつめて遺誡される。14日、慈叡の房で没する。16日、延暦寺の北、天梯尾の中岳に葬られる（のちに <b>御廟</b> が建てられる）。
866	7月、慈覚大師の諡号を贈られる。
888	円珍、円仁の学績顕彰のため <b>前唐院</b> を創建する。円仁の遺命をうけて南淵年名の旧山荘の地に <b>赤山禪院</b> を創建する。
972	良源、横川を独立せしめ三塔が確立する。
2001	12月、莞島郡によって <b>清海鎮大使張保臯碑</b> が建立される。

円仁ゆかりの寺社は、日本全国に689箇所<sup>(10)</sup>あるとされている。現在、日本における天台系寺社の総数は、4,545箇所<sup>(11)</sup>であるから、円仁ゆかりの寺院は、全体のおおよそ15%を占めることになる。このことから、円仁のなし得た偉業の大きさを改めて知ることとなる。

さて、日本の天台宗総本山比叡山延暦寺は、山内全域に散在する堂塔伽藍を包括した総称であって、根本中堂を中心とする東塔地区、釈迦堂を中心とする西塔地区、横川中堂を中心とする横川地区に大別され、これを比叡山三塔と呼んでいる。

帰国後の円仁の活動の拠点となる比叡山には、上記の【表2】において示した通り、11箇の円仁ゆかりの史跡がある。これらは、円仁自らが創建したもの（如法塔・横川中堂・常行堂・文殊楼院・法華総持院）、円仁と関わりを持つもの（浄土院）、後人が創建したもの（慈覚大師御廟・前唐院・赤山禪院・赤山明神社）、現代に創建されたもの（清海鎮大使張保臯碑）に区

分できるが、言うまでもなく、前三者は、創建当初の原形を留めるものではない。また、東塔・常行堂は焼失して久しい。

以下では、比叡山諸堂史研究の第一人者である武覚超博士の研究成果を引用する形で、観光事業化のために活用できる、上記に挙げた11箇の、比叡山における円仁ゆかりの史跡の特徴についてまとめておきたい。

## 2. 1 横川中堂

横川の本堂で如法塔の南に位置し、首楞殿とも根本観音堂とも称されている。約八年間にわたる入唐求法の旅から帰国した円仁は、嘉祥元年（八四八）九月に横川中堂を創建して聖観音像と毘沙門天像の二尊を安置した。この聖観音と毘沙門の両尊は、円仁が入唐求法の際、大風に遭遇し南海に没せんとしたが、観音力を念じたところ毘沙門身が現れ嵐が静まったという靈験により祀られたと伝えている<sup>(12)</sup>。【図1】参照。

### 2. 1. 1 赤山明神社（赤山宮）

慈覚大師が入唐求法のとき冥助を得た赤山明神を日本に勧請してお祀りしたのは、京都の赤山禅院であるが、その後、円仁の遺法を護らんがため、ことに如法堂を護らんがために横川の諸僧が新たに赤山明神の小社を建立した。これが横川中堂の東南にある赤山明神社の縁起として『山門堂舎』に伝えられているが、創建年時は定かではない<sup>(13)</sup>。

現在、ここに設置されている案内板（【図3】参照）には「赤山宮 慈覚大師円仁和尚が勅許を得て、入唐留学の時、中国の赤山に於て、新羅明神を留学中佛法研究の守護神とし、勧請自らの呪命神として受持し、その功德によって十年間修行が無事に終わったので、帰国後この地に祀られました。以来全国の寺院では、慈覚大師を天台法義伝承の大師と仰ぎ、赤山新羅明神を天台佛法守護神として祀っています。御利益は除災延寿と方除の神として、赤山明神と拝昌し、地蔵菩薩の化身でもあります。」と記されている。比較的人目に触れやすいところに建っているために、立ち読みしている参拝者の姿が確認できる。なお、日蓮（1222-1282）の旧跡と伝えられる横川・定光院には、三十番神の一人である赤山大明神（【図22】参照）が祀られている。

### 2. 1. 2 根本如法塔

横川中堂の北方にあり、元龜兵火以前は如法堂または根本如法堂と呼ばれたが、焼き討ち後は大正十四年（一九二五）によく再興されて、如法塔と改称された。『慈覚大師伝』等によれば、（中略）四十歳の頃、病弱となり視力も衰え死期を予期して北方の清閑の地横川に草

庵を結んだ。これを首楞嚴院と呼び、ここで円仁は三年間にわたって法華懺法と四種三昧の入定生活を送ったという。やがて健康が回復し視力も回復したのであろう、法華経八卷六万八千余字を書写している。そして書写した法華経を安置する小塔を建てたのが、根本如法堂の濫觴である。(中略)横川が東塔・西塔と並んで三塔の一つに数えられるのは、この円仁建立の宝塔に始まるのである。『門業記』所収の『如法経濫觴類聚記』によれば、円仁入唐求法よりの帰朝後、仁明天皇や藤原氏一門の外護を得て檜皮葺方五間の如法堂が建てられ、護持僧二口が給された<sup>(14)</sup>。【図6】参照。

## 2. 2 常行三昧院

『般舟三昧経』に基づく常行三昧の道場であるところから常行三昧堂とも般舟三昧院とも呼ばれるが、常行堂と略称されている。(中略)円仁は唐の開成五年(八四〇)五月に五台山を訪れたとき、竹林寺で法照始修の五会念仏とその音曲を学んで、承和十五年(八四八)に帰朝、これを比叡山に伝えて東塔の大講堂の北側に建立したのが常行堂の始まりである。(中略)なお常行堂は、東塔だけでなく西塔・横川にも建立された。(中略)十世紀後半以降、焼き討ちまでは、三塔それぞれに念仏道場としての常行堂がそろっていたと考えられる。しかしながら現存するのは釈迦堂の正面にある西塔の常行堂のみであり、阿弥陀如来を本尊とし、守護神として摩多羅神を勧請してお祀りしている<sup>(15)</sup>。【図9】参照。

## 2. 3 浄土院 (伝教大師御廟)

つぶさには法華清浄浄土院あるいは極楽浄土院と称している。(中略)最澄は弘仁十三年(八二二)六月四日、五十七歳のとき東塔北谷八部尾の中道院(房)にて入寂され、弟子たちによって最澄の遺骸はこの浄土院の地に葬られた。のちに円仁は中国から帰朝して五台山竹林寺の風をここへ移し、齊衡三年(八五六)七月十六日より正式の御廟としての廟供を始修したと伝えているが、その具体的な内容は定かではない<sup>(16)</sup>。【図10】参照。

## 2. 4 文殊楼院 (常坐三昧院)

根本中堂正面東側の虚空蔵尾にあり、一行三昧院とも称されるが、文殊楼院の名で呼ばれることが一般的である。当院は『文殊説般若経』及び『文殊問般若経』の所説に基づく常坐三昧実修の道場として最澄によって企画されたが、これを創建したのは円仁であった。貞観三年(八六一)、円仁はかつて五台山より将来した霊石を檀の五方(東・西・南・北・中)に埋めて建立に着手、その後、円仁滅して二年目の貞観八年(八六六)には、五台山の香木を体内に納めた文殊尊像を弟子達が造って安置したと伝えている。(中略)現在の建物は元亀兵火後の寛永十九年(一六四二)の再建によるものであり、二重の楼閣となっている<sup>(17)</sup>。【図11】参照。

#### 2. 4. 1 清海鎮大使張保臯碑

東塔・根本中堂の正面にある急な石段を上っていくと文殊楼があり、向かって左側に「清海鎮大使張保臯碑」（【図13】参照）が建っている。縁起ならびに碑文の内容については、先述したためにここでは省略する。

場所的に言えば、延暦寺のなかで、もっとも多くの参拝者が訪れる東堂・根本中堂の近くにあり、赤山禪院と同様、入唐中にその建立を構想したという点でつながりを持つ、文殊楼のとなりに位置するなど、申し分のない好立地にあることは違いないが、日本における張保臯の知名度やその意義から考えれば、横川・横川中堂のあたりがより適していたのではないかと、または両方に建てるべきではなかったのかと思うところである。

#### 2. 5 法華総持院（東塔院）

総持院の創建は平安初期の貞観四年（八六二）文徳天皇の御願により、円仁が入唐中に見聞した唐都長安青龍寺の鎮国道場の形態を模し、天台密教の根本道場として一〇カ年の歳月をかけ完成したものであり、円仁の上奏によって十四僧が常置され、永く修法せしめたのであった。（中略）円仁の建立以後、たび重なる焼失と再建を繰り返してきたが、（中略）永享七年の焼失以後の復興はなかったとみなければならぬであろう。しかるに昭和五十二年の伝教大師出家得度一千二百年を迎えるに際して総持院の再建が計画され、まず昭和五十五年には東塔が落成し、さらに昭和五十九年には灌頂堂、昭和六十一年には寂光堂と回廊・楼門などが完成した。そして比叡山開創一千二百年を記念して昭和六十二年四月二十一日・二十二日の両日にわたり法華総持院の総落慶法要が営まれ、ついにかつての盛観が、永享七年の焼失以来ほぼ五五〇年ぶりによみがえったのである<sup>(18)</sup>。【図15】参照。

#### 2. 6 前唐院

大講堂の北側（裏側）にある前唐院は、もと円仁平生の禅房であったという伝承もあるが、『天台座主記』（二四）は、円仁滅後二十四年目の仁和四年（八八八）に三井寺の開山円珍が円仁の学績を顕彰するために創建したと伝えている。円仁将来の仏教典籍（五八四部八〇二卷）は、円仁自身の奏上（貞観六年正月）により、顕教文献は最澄創建の根本経蔵に納められ、また密教文献は法華総持院に所蔵されていたが、総持院のたび重なる火災等のため、のちにこの前唐院に移されたのであった。それは天元三年（九八〇）の良源再建の時ではなかったかと推定される。（中略）なお前唐院には、円仁の真影も安置され、御影堂としての機能も有していたと考えられる<sup>(19)</sup>。【図17】参照。

## 2. 7 赤山禪院

赤山禪院は、円仁が開成五年（八四〇）の春、登州文登県の赤山法華院に逗留していたとき、赤山の山神などに本願が遂げられるように冥助を施してほしいと祈願し、もし本国に帰ることができたならば、かならず禪院を建立し、仏法を弘伝し、山神を資益すると誓願を立てたことに由来している。もっとも、円仁の在世中に赤山禪院の建立は実現されなかった。仁和四年（八八八）に至って、延暦寺の西坂本にあった南淵朝臣年名の山莊の地を大衆が力を合わせて銭二百貫で買い取って、そこに円仁本願の赤山禪院を建立したという。その後、寛平二年（八九〇）には、藤原朝臣基経が赤山禪院に年給<sup>(20)</sup>一分一人と施入し、宇多天皇がそれを聞き感悟して、内給<sup>(21)</sup>一分一人を賜わったと伝えられている<sup>(22)</sup>。

現在、境内に設置されている案内板には、下記のような内容が記されている。

平安時代の仁和四年（八八八）に、天台座主（延暦寺の住職）安慧が、師の慈覚大師円仁の遺命によって創建した天台宗の寺院である。本尊の赤山明神は、慈覚大師が中国の赤山にある泰山府君（陰明道祖神）を勧請したもので、御神体は、毘沙門天に似た武将を象る神像で、延命富貴の神とされている。後水尾上皇の修学院離宮御幸の際には、上皇より社殿の修築及び赤山大明神の勅額を賜った。この地は、京都の東北表鬼門に当たることから、方除けの神として人々の崇敬を集めている。また赤山明神の祭日に当たる五日に当院に参詣して懸取りに回ると、よく集金ができるといわれ、商人たちの信仰も厚く、このことから「五日払い」といわれる商慣習ができたといわれている。閑静なこの地には、松や楓が多く、秋には紅葉の名所として多くの人々でにぎわう。京都市

創建の年にあたる888年、安慧（794-868）はすでに没しているために、これに直接関わっていたとは思えない。東塔・西谷所属の赤山禪院は、現在では、「天台宗修道院総本山管領所皇城表鬼門赤山禪院」と呼ばれているが、本来、ここに祀られるべき赤山の神は、時の流れとともに、この地の風土に合わせて変遷してきた模様で、いつの間にか泰山府君（中国の五岳の一つ東岳泰山の神）と化して、現在では、泰山府君が赤山大明神（【図21】参照）として信仰を集めている。

赤山禪院の現在の執事の方に話を伺ったところ、赤山禪院は長らく無住寺であって、自分が入った時には、廃仏毀釈の影響もあり、遺跡といえるようなものは何も残っていなかったという。もちろん、張保臯並びに赤山法華院との関わりを示すようなものもなく、筆者のようにたまたま尋ねられる場合は、何もしてあげられずに困っているという話であった。

円仁が勧請しようとした赤山の神は、もはやここにはおられないのである。本来のしかるべ

き意義を付与し、一般にも広く認知させるためには、有識者による何らかのアクションが必要になろうと考えられる。

## 2. 8 慈覚大師御廟

東塔・東谷天梯尾の中岳華芳峰には、慈覚大師御廟がある。そこに辿りつくまでは、延暦寺会館からアップダウンの激しい、険しい山道を15分ほど歩くことになるが、よほどの覚悟がなければ、望まない方がよからう。そこはひと気のまるで感じられない山中であって、聖地という感覚を覚えさせてくれるところである。【図23】参照。

## 3 調査報告

身延山大学東アジア仏教研究室では、2015年8月18日から19日までの二日間にわたり、世界遺産（文化遺産）・古都京都の文化財・延暦寺において、「日本の天台宗における清海鎮大使張保阜関連文化遺産調査」を行った。参加者は、本研究室の担当教員である筆者と、桑名法見氏（立正大学大学院文学研究科仏教学専攻博士後期課程）の二名である。

調査の対象ならびにその順路は以下の通りである。

一日目：東塔・大講堂→根本中堂→**文殊楼**→清海鎮大使張保阜碑→法然堂→慈覚大師御廟  
→戒壇院→法華総持院（阿弥陀堂・東塔）→前唐院→西塔・浄土院

二日目：赤山禪院→西塔・常行堂・法華堂→釈迦堂→横川・根本如法塔→横川中堂→赤山明神社（赤山宮）→定光院→元三大師堂→如法水→三井寺（滋賀県大津市園城寺町）

上記の順路は、比叡山における円仁ゆかりの史跡を二日間で回るために、調査の目的で綿密に練られた多少ハードなコースになっているため、観光向きではないかも知れないが、観光事業化に向けたコース設定の一案として示しておきたい。

## おわりに

以上、張保阜の赤山法華院と、円仁の赤山禪院の関係について考察し、比叡山における円仁ゆかりの史跡を調査・紹介するとともに、その観光事業化に向けた現状報告を行った。

最後に、円仁の『入唐新求聖教目録』に「因明正理門論述記一卷 下卷沙門勝莊述」（『大正新脩大藏經』55: 1083c）とあることから、円仁は、海東仏教について決して無関心ではなく、ある程度興味を持っていたという事実、ならびに円仁の『入唐求法巡礼行記』は、『三国遺事』にその名がみられる新羅の縁会（『大正新脩大藏經』49: 1015c-1016a）以外は不明な点が多

い、八世紀末から九世紀初の海東における法華天台思想史を補う恰好の資料であり、このような観点より、再考されるべき余地があることを指摘しておきたい。

なお、円仁ゆかりの史跡の現在の様子については、最後に付した【図】を参照されたい。

## 付記

本稿は『2015年張保阜国際学術会議；東アジア法華寺(院)のネットワークと張保阜 [資料集]』に掲載した、拙稿「日本天台宗遺跡の観光資源化の現状：比叡山における円仁ゆかりの史跡」を改題して、加筆・訂正したものである。

## 参考文献

- Agency for Cultural Affairs, Government of Japan (文化庁) ed.  
 2015 『宗教年鑑 (平成26年版)』文化庁.
- Chang Pogo Memorial Organization ((社)張保阜記念事業会), Wando-gun (莞島郡) ed.  
 2015 『2015年張保阜国際学術会議；東アジア法華寺(院)のネットワークと張保阜 [資料集]』(社)張保阜記念事業会, 莞島郡.
- CHIDA, Kōmyō (千田 孝明)  
 2009 「円仁入唐求法の目的について」『円仁とその時代』:147-172, 高志書院.
- Edwin Oldfather Reischauer, TAMURA, Kansei (田村 完誓) trans.  
 1999 『円仁唐代中国への旅：『入唐求法巡礼行記』の研究』講談社.
- Ennin (圓仁), ISHIDA, Mikinosuke (石田 幹之助) ed.  
 1926 『[東洋文庫論叢] 入唐求法巡禮行記 [解説付]』: 第一, 第二, 第三, 第四, 解説』東洋文庫.
- FUKUI, Kōjun (福井 康順) ed.  
 1964 『慈覺大師研究』天台學會.
- IMANISHI, Ryū (今西 龍)  
 1970 「慈覺大師入唐求法巡禮行記を讀みて」『新羅史研究』: 291-367, 国書刊行会.
- KAGEYAMA, Haruki (景山 春樹)  
 1975 「摩多羅神信仰とその遺宝」『比叡山と天台仏教の研究 (山岳宗教史研究叢書2)』: 317-340, 名著出版.
- KAWASE, Kazuma (川瀬 一馬)  
 1974 『禪院并赤山記 (阪本龍門文庫複製叢刊11)』阪本龍門文庫.
- Kim, Moon-kyung (金 文經)  
 1987 「唐・日文化交流と新羅神信仰：日本天台僧最澄・圓仁・圓珍を中心に」『東方學志』54・55・56: 141-165.

- Kim, Moon-kyung, YAMASAKI, Masatoshi (山崎 雅稔) trans.  
2009 「円仁と在唐新羅人」『円仁とその時代』: 235-253, 高志書院.
- KIUCHI, Gyōō (木内 堯央) trans.  
1990 『最澄: 円仁 (大乘仏典: 中国・日本篇 17)』中央公論社.
- MAKITA, Tairyō (牧田 諦亮)  
1986 「円仁・求法の旅人」『1200年の歩み (朝日カルチャーブックス 60. 比叡山: 1)』: 63-91, 大阪書籍.
- MIYACHI, Naokazu (宮地 直一)  
1975 「平安朝に於ける新羅明神」『比叡山と天台仏教の研究 (山岳宗教史研究叢書 2)』: 341-391, 名著出版.  
1988 「慈覺大師圓仁と赤山新羅法華院: 唐代韓中日の交流」『韓國思想史學』 2: 205-210.
- MORI, Katsumi (森 克己)  
1964 「慈覺大師と新羅人」『慈覺大師研究』: 33-48, 天台學會.
- MURAYAMA, Shūichi (村山 修一)  
1994 「三塔の形成と顯密仏教の確立」『比叡山史: 闘いと祈りの聖域』: 69-92, 東京美術.
- MURAYAMA, Shūichi ed.  
1975 『比叡山と天台仏教の研究 (山岳宗教史研究叢書 2)』 名著出版.
- NAKATA, Masahisa (中田 雅久) ed.  
2012 『慈覺大師圓仁と行くゆかりの古寺巡礼: 比叡山の歩き方』ダイヤモンド社.
- NHK Promotions Inc. (NHK プロモーション) ed.  
2007 『円仁とその名宝: 慈覺大師』NHK プロモーション.
- OGINO, Minahiko (荻野 三七彦)  
1964 「赤山の神と新羅明神: 慈覺大師入寂千百年忌に因んで」『慈覺大師研究』: 141-155, 天台學會.
- SAEKI, Arikaio (佐伯 有清)  
1986 『慈覺大師伝の研究』吉川弘文館.  
1989 『円仁』吉川弘文館.
- SAITO, Enshin (斎藤 圓眞)  
1983 「赤山明神に關する一考察」『天台學報』 26: 162-165.  
1996 「赤山法華院の現況等について: 『巡礼行記』などに見られる山東諸寺院の歴史と現状」『天台學報』 38: 28-33.
- SHIMADA, Hiromi (島田 裕巳)  
2014 『比叡山延暦寺はなぜ6大宗派の開祖を生んだのか』ベストセラーズ.

SUZUKI, Yasutami (鈴木 靖民) ed.

2009 『円仁とその時代』高志書院.

TAKE, Kakuchō (武 覚超)

1993 『比叡山三塔諸堂沿革史』叡山学院.

2008 『比叡山諸堂史の研究』法藏館.

USHIBA, Shingen (牛場 眞玄)

1939 「慈覺大師の史蹟としての赤山の位置に就いて」『叡山學報』18: 61-97.

YAMAGUCHI, Kōen (山口 光円)

1963 『比叡山延暦寺（日本のお寺シリーズ5）』教育新潮社.

## 注

- (1) 円仁撰『入唐求法巡礼行記』巻第二に「生年未祇奉。久承高風。伏増欽仰。仲春已暄。伏惟。大使尊躰。動止萬福。即此圓仁。遙蒙仁德。无任勤仰。圓仁。爲果舊情。淹滯唐境。微身多幸。留遊大使本願之地。感慶之外。難以喻言。圓仁。辭鄉之時。伏蒙筑前大守寄書一封。轉獻大使。忽遇船沈淺海漂失資物。所付書札隨波沈落。悵悵之情。無日不積。伏冀莫賜恠責。祇奉末期。但増馳結不情。謹奉狀起居。不宣謹狀 開成五年二月十七日 日本國求法僧傳燈法師位圓仁狀上 清海鎮大使 麾下謹空」（『大日本仏教全書』113: 212ab）とあり、若干の相違（太字：誤字八字、脱字一字）が認められる。
- (2) 「私は私の生涯においてまだ閣下にお目にかかる光栄に浴しておりませんけれども、私は閣下の偉大なことはかねがね承っております。私はへり下ってより一層閣下を尊敬いたしております。春も半ばとなり、すでに暖かくなりつつありますが、私は伏して巨万の幸運が閣下のお身の上に充ちることを祝福し、またご活躍をお祈りいたします。私、円仁ははるかに閣下の恵みを受け、感謝にたえません。長年胸に秘めた願いを達成するために、私は中国に滞在いたしました。ふつつかな身ではありますが、偉大な幸運に恵まれ、私は閣下の発願によって祝福された地域を旅行することができました。私の慶びを表わす言葉もございません。私が故国を後にしたとき、筑前守（北九州の一地方の総督）より閣下に宛てた親書を託されました。しかし、私どもの船ははからずも海の浅瀬に乗り上げてしまい、私どもの持ち物は流されてしまいました。私が託された親書も波の中に沈んでしまいました。そのことが毎日私にとって大きな悲しみの原因でありました。私は、どうか閣下が私をとがめられないよう伏して懇願し奉ります。私はいつの日に閣下にお目にかかれるか分かりませんが、はるか遠くより、閣下のことをつたない私なりに一層念じてやみません。うやうやしく閣下のご機嫌をお尋ね申し上げてしたためます。うやうやしく簡単に記す 開成五年二月十七日 日本國求法僧傳燈法師位 円仁 状を上る 清海鎮張大使閣下 へり下ってうやうやしく」cf. TAMURA, Kansei [1999: 440-441]
- (3) 原本（観智院本）には「長」とあるが、文意に従って「張」に訂正した。
- (4) 円仁撰『入唐求法巡礼行記』巻第二に「其赤山純是巖石高秀處。即文登縣清寧郷赤山村。山裏有

寺。名赤山法花院。本張寶高初所建也。長有庄田。以充粥鉢。其庄田。一年得五百石米。冬夏講說。冬講法花經。夏講八卷金光明經。長年講之。」(『大日本仏教全書』113: 201ab) とある。

- (5) 『慈覚大師伝』(通行本)に「下船登當州赤山法華院送過冬月。明年春。大師祈願。海會諸尊。當處山神。必施冥助。令遂本願。若適歸本國。當建立禪院。弘傳法門。資益山神。此山盛傳禪法。故發此願。」(『統天台宗全書』史伝2: 63b)とあり、『慈覚大師伝』(三千院本)には「即便下船。登其州赤山法花院。過於一冬。爰和尚悲嘆。好師難值。眞法難得。以何方便。得入國內。爲果意願。伏願海會諸尊。願拯愛慈。當處山神助我此願。若有助成。我當還國建立禪院。傳禪門法。資益山神(云云)此赤山院盛傳禪法。故發此願也。」(『統天台宗全書』史伝2: 48b)とある。
- (6) cf. TAKE, Kakuchō [1993: 105, 2008: 230]
- (7) cf. TAKE, Kakuchō [2008: 9-10]
- (8) 『慈覚大師伝』(通行本)に「又爲赤山神。造禪院之願。是爲令求法之事無有障礙也。」(『統天台宗全書』史伝2: 70b)とある。
- (9) 円仁関連略年表は、SAEKI, Arikiyo [1989: 293-303] 所収の「略年譜」、TAKE, Kakuchō [1993: 269-273, 2008: 335-340] 所収の「比叡山三塔諸堂略年表」、NHK Promotions Inc. [2007: 208-211] 所収の「円仁関連年表」を用い、取捨選択したものである。
- (10) cf. NHK Promotions Inc. [2007: 158-159], SHIMADA, Hiromi [2014: 63] には「こうした円仁の創建や中興の伝承は、文献史料によっては裏づけられず、必ずしも事実とは言えないものと思われるが、円仁の弟子筋にあたる天台宗の僧侶たちが伝えていったものと考えられる。」とある。
- (11) cf. Agency for Cultural Affairs, Government of Japan [2015: 50]
- (12) cf. TAKE, Kakuchō [1993: 135, 2008: 249], TAKE, Kakuchō [1993: 7] には「北洞幽閑の地横川に草庵を結び自ら書写した法華経を納める小塔(後の如法堂)を建てたのが横川発祥の起源をなすもので、横川の地を首楞嚴院と称し、承和三年(八三六)には「首楞嚴院式」九条を定めている。その後、入唐求法の旅から帰山して嘉祥元年(八四八)、根本観音堂(横川中堂)を創建して横川発展の基礎を固めるのである。」とある。
- (13) cf. TAKE, Kakuchō [1993: 138-139, 2008: 251]
- (14) cf. TAKE, Kakuchō [1993: 139-140, 2008: 251-252]
- (15) cf. TAKE, Kakuchō [1993: 58-60, 2008: 199-200]
- (16) cf. TAKE, Kakuchō [1993: 69-70, 2008: 206], SAEKI, Arikiyo [1989: 251] には「浄土院廟供は、斉衡三年(八五六)七月十六日に、円仁が五台山竹林寺の風に習って、最澄の廟前において供養を行なったものと伝えられている。」とある。
- (17) cf. TAKE, Kakuchō [1993: 56-57, 2008: 198], SAEKI, Arikiyo [1989: 252] には「文殊楼院は、円仁が五台山の南台を巡礼していたとき、文殊菩薩の奇瑞を感得したことにもとづいて創建されたものである。『通行本伝』によると、開成五年(八四〇)七月、円仁は南台を礼して夕刻に及んだころ、にわか

に光り輝く聖燈を見たという。歓喜した円仁は、文殊菩薩の冥感があって、このような瑞相があらわれたものとし、もし故国に帰ることができたならば、文殊閣を造って至心に持念し、身をなげだして礼拝することを誓い、そして唐での求法の成就と「本朝の皇帝の宝祚長久、仏法の興隆」とを文殊菩薩に願ったと伝えている。」とある。

(18) cf. TAKE, Kakuchō [1993: 65-68, 2008: 204-206]

(19) cf. TAKE Kakuchō [1993: 87, 2008: 218-219]

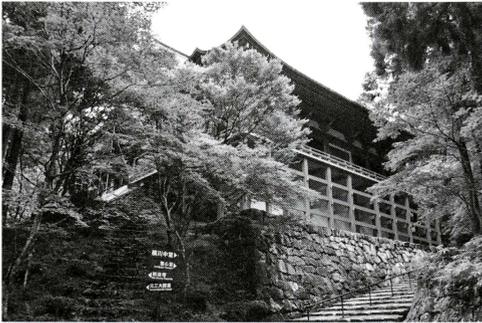
(20) 【年給】「(「年料給分」の略) 年官と年爵。これを許された者(給主)は任意の者を一定の地位につけることができ、近親者を任官・叙位させたり、任料・叙料を得たりすることができた。給主の地位に従って内給(天皇)・院宮給・親王給・公卿給・女御給などの別がある。」(『精選版日本国語大辞典』2: 2113)

(21) 【内給】「平安中期以降に行なわれた、天皇の年給。毎年、諸国の掾二人、目三人、および史生その他の一分官二〇人の任官を請求する権利で、天皇はこれによって近侍の者に官職を与え、あるいは任料を得て私的な財源に充て、また、この権利を乳母、女房に年官として与えてその給与の一部とするなどした。」(『精選版日本国語大辞典』2: 1904)

(22) cf. SAEKI, Arikiyo [1989: 253-254]

### 【キーワード】

比叡山延暦寺、清海鎮大使張保臯碑、張宝高、聖琳、慈覚大師、在唐新羅人、法華信仰



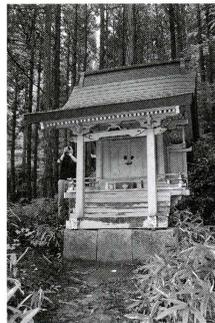
【図1】横川・横川中堂



【図2】横川・横川と円仁



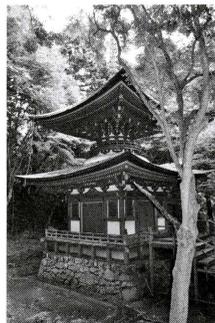
【図3】横川・赤山宮



【図4】横川・赤山宮



【図5】横川・赤山宮真正面の横川中堂



【図6】横川・根本如法塔

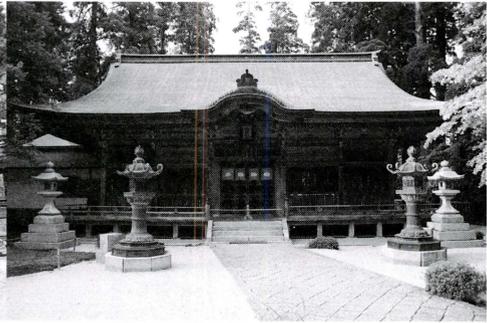


【図7】西塔・常行堂

【図8】西塔・法華堂



【図9】西塔・常行堂



【図10】西塔・浄土院



【図11】東塔・文殊楼



【図12】東塔・清海鎮大使張保皐碑



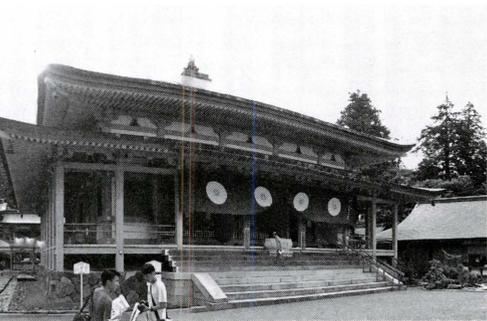
【図13】東塔・清海鎮大使張保皐碑



【図14】東塔・法華総持院（東塔）



【図15】東塔・法華総持院（東塔）



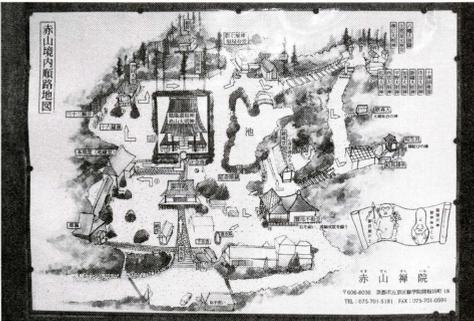
【図16】同左（阿弥陀堂）



【図17】東塔・前唐院



【図18】赤山禪院の山門



【図19】赤山禪院の境内地図



【図20】赤山禪院の本殿



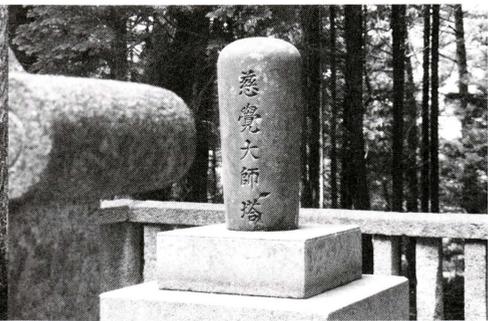
【図21】泰山府君絵馬



【図22】横川・定光院の赤山大明神像



【図23】慈覚大師御廟



【図24】慈覚大師塔